

合同教育研究会議（7月14日開催）議事概要

1 開催日時

令和3年7月14日 13時00分～14時30分

2 場所

本部棟3階 特別会議室

3 出席者

鈴木学長、石堂副学長兼高等教育推進センター長、狩野副学長兼研究・地域連携本部長、
宮野副学長兼事務局長、猪股教育支援本部長、三上学生支援本部長、橋本企画本部長、
劉高等教育推進センター国際教育研究部長、工藤看護学科長（福島学部長代理）、
高橋社会福祉学部長、亀田ソフトウェア情報学部長、高嶋総合政策学部長、
川崎盛岡短期大学部長、松田宮古短期大学部長、
菅原委員（学外委員：岩手大学名誉教授）、
長谷川委員（学外委員：製品評価技術基盤機構理事長※Web出席）

[事務局]

鈴木事務局次長兼総務室長、関屋教育支援室長、鎌田学生支援室長、藤澤研究・地域連携室長、
北島企画室長、高橋宮古事務局長、西川総務財務課長、八木主幹、渡部主査

4 会議の概要

議事録確認

前回会議6月9日の議事録（議事概要）については、原案のとおり了承された。

審議事項

なし

協議事項

(1) 新型コロナウイルス感染症の影響により入国が困難な留学生に係る休学等の取扱いについて

鎌田学生支援室長から、資料に基づき説明があった。

委員から、休学期間の延長はいつまでかとの質問があり、鎌田学生支援室長から、現在検討中であり、9月の教育研究会議で学則改定と合わせて協議いただく予定であるとの回答があった。

また、学長から、研究面においても同感染症の影響で支障が生じている旨の発言があり、これに対し、鎌田学生支援室長から、研究データが、現地や施設に入れないため集まらず、研究が進まない場合があるとの説明があり、そのような事例があれば合わせて検討するので学生支援室へお知らせいただきたいとの発言があった。

加えて、三上学生支援本部長から、同感染症に係る事情で学生、留学生に関して様々な問題があると思われるので、その際は、学生支援本部へ声をかけてもらいたいとの発言があった。

(2) 退学・休学・復学に係る意見書の作成について（意見交換）

鎌田学生支援室長から、資料に基づき説明があった。

学長から、学生の退学・休学について最終的な決裁をするに当たり、なぜ学籍異動をすることになったのか経過が欲しい、経過を見ることにより、時代によって変化する学生の気質の傾向を調べ、対策を練ることができるとの発言があった。

また、委員から、この意見書について、手続の過程の正当性の問題と、なぜ学籍異動をすることになったのかの実質的な内容の問題があり、この2つの理念が統一されていないと感じたこと、さらに、学生の個人情報について、教授会や委員会などで記録に残すことについてどう考えるのか、場合によっては全学的な検討の対象になってくるとすれば、非常にデリケートな問題であることから、できれば手続の確認に徹する形でまとめていただく方がいいのではないか、との発言があった。

これに対し三上学生支援本部長から、学籍異動の実質的な内容についてどの程度の内容を記載するかについて、経済面やメンタル面等、学生支援本部でのサポートの必要があるようなケースについては情報を把握しておきたいとの発言があった。

また、委員から、手続面として学部等できちんと手順を踏んでいたかチェックしなければならない一方で、学生の身分に関わることなので、合理的な判断を下すための事実も記載していただかなければいけないと思う。例えば、経済的な事情が原因だとして、それだけでは判断できないということになれば、より詳細に、どのような理由で経済的に困窮したか等も記載してもらう必要が出てくるのではないかと思う、との発言があった。

また、委員から、新しい様式案の「学籍移動に対する学部の意見」欄について、学部の意見を「認める」または「認めない」旨の記載でよいのかとの質問があり、これに対し鎌田学生支援室長から、学部としての意見の記載を想定しているが、必要に応じて自由記載欄を設けること等も検討したいとの発言があった。

また、学長から、学生への対応方法として、最近はメールでのやり取りが多いが、メールは真意が伝わりにくく、悪い方に捉えられる恐れがある旨の発言があった。

(3) (仮称) いわてDX推進連携会議への本学の参画について

藤澤研究・地域連携室長から、資料に基づき説明があった。

委員から、具体的に部会が動くのはいつかとの質問があり、藤澤研究・地域連携室長から、現時点では事務局から日程について連絡が来ていない状況であるとの回答があった。

学長から、日本はDXで遅れを取っている状況である。18年前、資料P.20の図を作り、データベース化を図ったがその際にも、データの形態がバラバラであるという課題が生じた。東北大学で評価のデータベースは作ることができ、それは今も全国5~60の大学で使われている。

本学でもDX化を進めるべきであり、データを統一して一つにまとめるシステムを作ってはどうか、との発言があった。

(4) 第四期中期計画の策定について

橋本企画本部長から、資料に基づき説明があった。

学長から、中期目標は県から与えられるものと言われているが、県と大学はだいぶ違う。教育研究機関である大学が中心になり考えていかなければならないと思っている、との発言があった。

これに対し橋本企画本部長から、学長の仰るとおり、大学としての目標というものをしっかり定めていくためには、県から与えられる枠組みではあったとしても、県が示す目標の素案作りが非常に重要だと考えているとの発言があった。

(5) 次世代法及び女性活躍推進法に基づく一般事業主行動計画の策定について

鈴木事務局次長から、資料に基づき説明があった。

委員から、目標自体はいいと思うが、進捗の管理はどのように行うのか。5年は長いので、例えばこのような会議に毎年状況報告をして意見を伺うなど計画しているか。そのような場がないと5年経った結果の評価になってしまう。また、取組が進んだら目標は新しいものにして進めていくべきであるが、進め方の管理はどのように考えているか、との発言があった。

これに対し鈴木事務局次長から、ご指摘のとおり、計画に基づく進行管理をしなければならない。全部数量的に押さえられるものではないが、年度ごとに実績を押さえ、公表するような形で進行管理をしつつ、年度ごとに次の年への取組を反映させるような仕組みを検討している、との発言があった。

また、委員から、目標3の女性教職員の管理職の割合について、大学教員の管理職の性格として権利というより義務という性格の方が強く、できればやりたくない人が多い。また、企業官庁と違い、登用すれば就いてもらえるというわけではなく、本人の合意が必要ということもあり、教員の管理職をコントロールするのは難しいということを理解して進めていく必要があるとの発言があった。

また、学長から、子育て支援について大学の規模が小さいと難しいことから、近隣の大学と本学とで一緒になって子育て支援をするのも一案である、との発言があった。

報告事項 (口頭報告)

(1) 学生本人の新型コロナウイルスワクチン接種時等の授業への対応について

猪股教育支援本部長から、資料に基づき説明があった。

(2) 令和3年度第1回就職支援連絡調整会議の開催結果について

三上学生支援本部長から、資料に基づき説明があった。

(3) 「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン (実施基準)」の改正に伴う対応について

狩野研究・地域連携本部長から、資料に基づき説明があった。

(4) 令和3年度科研費の新規採択状況について

狩野研究・地域連携本部長から、資料に基づき説明があった。

(5) 岩手県立大学外部資金等受入状況について

狩野研究・地域連携本部長から、資料に基づき説明があった。

(6) JST 共創の場形成支援プログラムへの対応について

狩野研究・地域連携本部長から、資料に基づき説明があった。

(7) 「コンバージェンス@いわてイノベ」事業実施について

狩野研究・地域連携本部長から、資料に基づき説明があった。

学長から、企業と学部との連携をもっと密にするため、産学官の「連携」の役目をする母体が必要であり、どのように作っていくか検討している旨の発言があった。

2 報告事項（資料報告）

(1) 令和4年度編入学試験（ソフトウェア情報学部）選抜結果について

(2) 大学院入試（社会福祉学研究科学内推薦入試、ソフトウェア情報学研究科第一次募集）出願状況について

(3) 国の修学支援新制度に係る機関要件について

(4) 令和3年度「大学で学ぶ・大学を学ぶ」第13回授業岩手県知事講話（遠隔配信による公開）

(5) 令和3年度第1回安否確認システム報告訓練の実施結果について

(6) 「令和3年度第3回職員衛生委員会」の結果について

その他

委員から、協議事項1、2について新型コロナウイルス影響下でのコミュニケーションを強く意識することが大事だと思う。学生と教員の関係では対面指導を工夫してもらいたい。DXに関しては学長の報告にあった東北大で作成された評価システムを10年経った今も活用している。中期計画については特に教育面において、大学が、県が作る将来の中期目標を先導する内容を含むものになることを期待する。女性活躍推進については、大学で教育を受けた学生が国家公務員として活躍することに期待したいと思うので、よろしくお願したい、との発言があった。

また、委員から、第四期中期計画の策定について、第三期は学部の動きが見えにくかったので、第4期ではそのような視点を入れてもらいたいとの発言があった。

学長からは、第4期の最終年が開学30周年となり、全学的に頑張っていきたい。また、第三期目標は漠然としたものが多かったので、第四期はより具体的な、先生方が見てどう取り組んでいくかわかるような内容にしたいとの発言があった。